

大学における乳児期・子育て支援グループ活動Ⅰ

— 親支援・家族支援の場としての「子育てひろば」 —

柳瀬 洋美

本研究は、大学における乳児期の親子を対象とした子育て支援グループ活動について、「ひろば」という活動形態に着目し、親支援・家族支援という視点から、大学ならではの「子育て支援グループ活動」と「子育てひろば」のあり方についての探求を試みた。その結果、乳児期の子育て支援に対する親のニーズは高く、また0歳から3歳未満という、発達面において幅も個人差も大きい乳児期の子どもたちにとって、「ひろば」という比較的自由度の高い「場」で集団で過ごす意味は大きく、そこで安定したメンバーでグループ活動を体験として積み重ねていくことは、大人にとっても子どもにとっても大変有意義であることがわかった。また、大学ならではの子育て支援活動という点で、学生の果たす役割も大きく、特色であるということが示唆された。

キーワード：乳児グループ活動 地域子育て支援拠点事業 子育てひろば 親支援・家族支援
共に育ちあう場

Ⅰ. はじめに

子どもの問題は社会の問題を映し出す鏡と言われる。

現代社会のさまざまな変容は、個人が個人の判断で自由なライフスタイルを選ぶことを可能にする一方で、多くのひずみも生み出した。

少子化や核家族化、過度の個人主義は、人間関係の希薄化を加速させ、家族の結びつきをも不安定なものとし、我々にとってもっとも身近で小さな社会である「家庭」が持つ力を弱めた。このことは同時に、地域が持つ、個人を支え育む力をも低下させている。

また、知育偏重や効率主義、情報の氾濫は、我々から「自分自身の力でさまざまな体験を積み重ねながら生きる」という機会を奪い、生きていく中で得た経験を元に情緒面や社会性を「じっくり成熟させる時間」を奪った。その影響を大きく受けているのが子育て中の親子といえるかもしれ

ない。

親子は豊かな情報社会にありながら、いつしか社会から孤立することとなっている。

「知識を持っている親たちが子育てに不安を持たないか」と決めてそういうわけでもない。現実には不安を訴える親は後を絶たないのである。……（中略）……現代の親たちは『それでいいんだよ』『大丈夫だよ』…そう言ってくれる『人』を求めている（柳瀬、2003）¹⁾

今、こうした現代社会の変容から生じたひずみが、我々の生活に及ぼす影響は深刻なものとなっている。育児不安、虐待、うつ、引きこもり、家庭内暴力など、子どもと家族をめぐる問題が取り上げられない日はないといっても過言ではない。

しかしながら、この混沌とした状況の中で、人々が気づき始めたことがある。それは、人が生きていく上で、人と人とのかかわりが大切なものであり、人と人との結びつきが大きな支えとなるのだということである。そこで見直され始めているのが「地域の持つ力」である。

東京家政学院大学現代生活学部児童学科

ひと昔前であれば、家庭は地域社会の中であって共に子どもたちを育ててきた。時には、この密接な結びつきがしがらみとなって個人の自由を束縛する弊害となる場合もあるだろうが、同時にこれほど力強い日常的な子育て支援もない。

厚生労働省は、一連の少子化対策の流れの中で、両親が共働きの家庭を対象とした保育サービスの充実に主眼をおいていた当初の姿勢から、親の労働状況にかかわらず、すべての子育て家庭を対象とした地域子育て支援へと姿勢の見直しをはかっている。さらに、そこに児童虐待防止などの児童福祉や児童養護にかかわる重要な施策も統合され、2005年～2009年には「子ども・子育て応援プラン」として施行されている。この施策では、子どもだけでなく親の育ちにも重きを置いており、4つの柱の1つとして「子育ての新たな支え合いと連帯」が位置づけられており、その中に「地域における子育て支援の拠点整備」が明記されている。この地域子育て支援拠点事業のひとつの形態が、かつて国の事業であった「つどいの広場事業」を引き継ぐ形で始められた「ひろば型」事業である。また国と並行して、東京都の「子育てひろば事業」などのように、各自治体においても地域子育て支援拠点事業（ひろば型）が推進されている。通称「子育てひろば」と呼ばれるものである。

本研究では「ひろば」ということばを使用するに際し、主に、厚生労働省が「つどいの広場」創設時の趣旨として掲げた文章にある「主に乳幼児（0～3歳）をもつ子育て中の親が気軽に集い、うち解けた雰囲気の中で語り合うことで、精神的な安心感をもたらし、問題解決への糸口となる機会を提供する場」という意味で用いるものとする²⁾。

ちなみに、厚生労働省が地域子育て支援拠点事業の基本的な事業内容として挙げたものは次の4点である³⁾。

- 子育て親子の交流の場の提供と交流の促進
- 子育て等に関する相談・援助の実施
- 地域の子育て関連情報の提供
- 子育て及び子育て支援に関する講習等の実施

II. 目的

「大学における地域子育て支援活動を考える 乳児期・子育て支援活動の実践」⁴⁾では、乳児期の子育て家庭の子育て支援に対するニーズは非常に高く、また、大学で行われていることに魅力を感じる人が多いということがわかった。

さらにこうした活動が、子どもや親自身にとってももちろんのこと、学生の育ちにとっても重要な役割を果たすということが示唆された。

そこで、本研究では、前研究で得られた結果・考察を踏まえ、現在、東京家政学院大学でおこなわれている「乳児期・子育て支援グループ（以下、乳児Gとする）活動」の特徴ともなっている「ひろば」という活動形態について、以下の2点について探求することを目的とする。

1. 親支援・家族支援の場という視点から、どのような活動のあり方が望ましいのか
2. 大学ならではの子育て支援グループ活動の特色とは何か

III. 方法

1. 研究の対象

東京家政学院大学・乳児グループ活動「ぼかばかひろば」に2007年度～2009年度に参加した地域在住の0歳から3歳未満の乳児43名とその保護者39名（人数はすべて延べ人数）を本研究の対象とする。

なお、2007年度にひろばを開始して以降、現在に至るまでの過去3年間の参加者の内訳は表1の通りである。

表1. 参加者の内訳

*()内の数字は、後期からの参加者数
** 転出者を表す

参加者\活動年度 (子どもの年齢は活動開始時のもの)	2007年度	小計	2008年度	小計	2009年度	小計	計
0～1歳	7(1)*	13	7(3)	13	3(1)	17	43
1～2歳	6		3		13(-1)**		
2～3歳	0		3(3)		1		
保護者(主参加者)	13(1)		11(5)		14(1,-1)		39
学部生(4年生)	6		4		13		23
大学院生	0		2		1		3
教員	2		1		2(内1名は補助員)		5

人数はすべて延べ人数

乳児グループ活動とは

本研究の対象である「乳児グループ活動・ぽかぽかひろば」の活動開始に至る経緯については、先行研究「大学における地域子育て支援活動を考える 乳児期・子育て支援活動の実践」⁵⁾で述べている。2007(平成19)年度に本研究者ら教員と学生が中心となり、子育て支援自主研究グループ「ぽかぽかひろば」を設立、その後、2008年度には東京家政学院大学家政学部児童学科の専門科目(4年次選択科目)である「児童学総合演習」として、また2009年度からは、同じく児童学専門科目(4年次選択科目)の「児童学臨床実習」の1つとして幼児グループ活動と共に位置づいている。

本グループ活動の参加対象親子は、地域在住の0歳から概ね3歳未満の乳児とその家族10~15組程度(参加登録制)である。加えて、児童学を学んでいる学生(学部生・大学院生)、教員から成るリーダーチームによってグループメンバーは構成されている。

乳児グループ活動の趣旨と概要

(1)乳児グループ活動「ぽかぽかひろば」の主な活動趣旨は次の4点である。¹⁾

親と子がほっとできるような「居場所(子育てひろば)作り」を通し、大学内における子育て支援活動という特性を生かし、親子・学生・教員が出会い、共に育ちあう子育てをめざす。

ひとりひとりの子どもたちの成長や個性を大切に、共にゆったりとした楽しい時間を過ごす中で、心豊かで多様なかわりを育む。

参加者同士がお互いに子どもたちの様子を見守りながら、子育て等についての話し合いや情報交換をおこなう。

学生にとっては直接、乳児や保護者と接することで、乳児期の子どもたちの成長を実感し、また保護者の思いを受けとめ共感理解する力を培う上で貴重な経験の場となる。また、保護者にとっても他の親子とのかかわりを持つことで、自身の子育てを見つめ、視野を広げることができる。

(2)活動概要~2009年度活動より~

1)活動期間・実施回数および活動時間 1回の主な活動の流れ

「ひろば」活動期間および活動回数 5月~翌年1月の各月2回程度(年間全13回)となっており、活動は前期(5~7月)・後期(10~1月)の2期に分かれている。(8,9月は夏期休暇)

また、後期からの参加も可能となっているが、これは、乳児とその親や家族対象の子育て支援ということで、参加の機会を年度当初の1回に限定せず、出産後早期の支援が可能となるよう考慮したものである。

1回の活動時間は10:40~12:50(昼食休憩時間12:00~12:50を含む)となっており、乳児の活動ということで子どもたち一人ひとりの成長や興味・関心の発達に応じた遊びを大切に活動を行っている。ただし、毎回の活動の最初と終了近くに、お名前呼びや手遊び、歌を中心とした活動(スポットタイム)を取り入れている。同じ活動を共有する仲間を意識し、また、特に積極的な親と子の分離は行わず、同じ室内に親グループ活動コーナー「ぽかぽかサロン」(以降、サロンコーナーとする)を設置する形で、親同士の情報交換や相互交流を行っている。(表2参照)

表2. 1回の主な活動の流れ(2009年度)

10:40	活動開始(ぽかぽかひろばオープン) [親子合同活動・前半] ・参加児のお名前呼び ・自由遊び
11:15	[親子分化活動] ・親グループ活動「ぽかぽかサロン」 (サロンコーナー) ・子グループ活動(自由遊び)
11:40	[親子合同活動・後半] ・手遊び・歌遊び(スポットタイム) ・さよならの歌
12:00	ひろば活動終了 *終了後、希望者は自由に昼食休憩
12:50	全活動終了

(*時刻はおおよその目安)

なお毎回の活動後には、リーダーチームによるその回のまとめと話し合い、および参加者へ宛てたおたよりの作成を、また「ひろば」がない週は次の活動の準備などをおこなっている。

2) 年間の主な活動内容

2009年度の主な活動内容は資料1(年度当初、参加家庭に配布)に示す通りである。

今年度の新たな試みとして、2008年度までは12月で終了していた「ひろば」を1月にも1回実施し、オリエンテーションを含めて年間11回で

あった活動回数を13回に増やしたことで、これまでおこなっていなかった屋外散歩活動の実施、また、同じ本学の地域子育て支援グループ活動である幼児グループ活動と合同で、10月の土曜日を利用し、平日は参加が難しい父親やきょうだい、祖父母などの家族も参加が可能な特別活動を実施した。

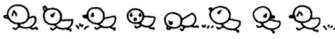
これらの試みは、2007年度・2008年度の参加者へのアンケート結果を反映させたものであるが、履修学生数が2008年度の4名から13名へと増加したこともあり、試みが可能となった。

資料 1



平成21年度 乳児グループ

ぽかぽかひろば 年間予定表




回	月	日	活動内容(予定)	備考
①	5月	8日	出会いの日(オリエンテーションA)	どちらか1日に参加 (初回案内を参照)
		15日	出会いの日(オリエンテーションB)	
②		22日		
③	6月	5日		
④		19日	おさんぽ	
⑤	7月	3日	七夕	
⑥		17日	前期最後の活動	
8・9月 ~ 夏休み				
⑦	10月	9日	後期第1回目の活動	
⑧		24日(土)	乳児&幼児グループ合同家族参加デー(体をいっぱい動かして遊ぼう!)	外部から、体操(リトミック)の先生がいらっしやいます
⑨	11月	6日		
⑩		27日		
⑪	12月	11日	クリスマス会	
⑫		18日		
~ 冬休み				
⑬	1月	29日	また会う日まで	今年度最終活動

* 特に活動内容に記載のない日は通常のひろば活動となります。

【連絡先】

東京家政学院大学・児童学科 柳瀬 洋美(ヤナセ ヒロミ)
 TEL: 042-782-4992(保育臨床心理学研究室)
 Mail: yanase@kasei-gakuin.ac.jp



【活動日のみ(10:00~)】
 TEL: 042-782-9811(大学にかけて内線4820または4639を呼び出し)

2. 研究の方法

(1) アンケート調査および活動内容の分析

1) 2007年度～2009年度の過去3年間の参加者を対象とした申し込み時のアンケートから、乳児グループ活動への参加動機や「子育てひろば」活動への期待について分析し、参加者の活動に対するニーズについて考察する。

2) 前年度(2008年度)および2009年度の活動参加保護者を対象としたアンケート(前期終了後の夏期休暇中実施のもの。)から参加者がおかれている子育て環境について知り、子育てに対する思いを理解する。

3) 主に2009年度の活動を対象に、アンケート調査(前期終了後の夏期休暇中実施のもの。)から活動に対する満足度や要望を分析、また、乳児グループ活動時間内におこなわれている親グループ活動「ぼかぼかサロン」の活動内容について分析し、考察する。

(2) 事例の分析と考察

1) 2007年度～2009年度の過去3年間の活動を親支援・家族支援という視点から捉えた時、乳児グループ活動の成果の特色がよく表れていると思われる事例について取り上げ、アンケートで寄せられた感想やサロンコーナーでの様子や発言、活動時の様子などを通じて、その変化の様子を分析し考察する。

IV. 結果と考察

(1) アンケート調査

1) 参加動機と活動に対する期待

2007年度～2009年度の過去3年間の参加者(39名中、有効回答数36名)を対象とした申し込み時のアンケートから、乳児グループ活動への参加理由や「子育てひろば」活動への期待について分析したものが図1、図2である。

参加理由として「乳児が参加できる活動だから」というのを挙げた人がもっとも多く、特に重視した理由としても3分の1の人が選択して

いる。次いで「子育てについての情報がほしいから」「大学での活動だから」「親同士の仲間がほしいから」となっている。

図1. ぼかぼかひろばに参加しようと思った理由(複数回答可)

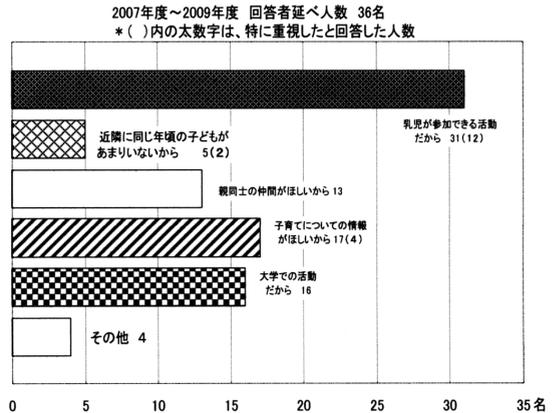
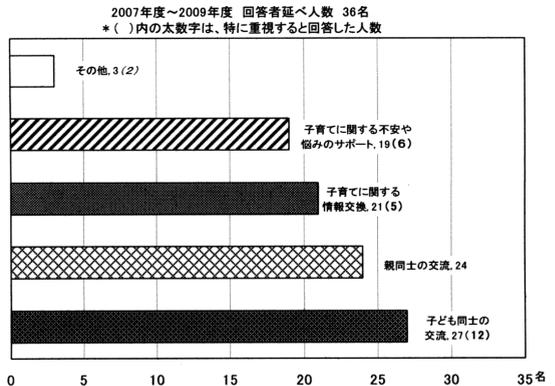


図2. 子育てひろば活動に期待するもの(複数回答可)



活動に期待するものについては項目間に大きな差はなく、多い順に「子ども同士の交流」「親同士の交流」「子育てに関する情報交換」「子育てに関する不安や悩みのサポート」となったが、この中で、「子育てに関する不安や悩みのサポート」が4項目の中では順位的に一番下であったにもかかわらず、特に重視したいものとして、「子ども同士の交流」に次いで多く選択されていた。

2) 子育ての環境と子育てに対する思い

2008 年度・2009 年度の参加者に対し「子育てを大変と感じますか」という質問をおこない、「感じる やや感じる どちらともいえない あまり感じない 感じない」の 5 段階で評定してもらい、「感じる」を 5 点満点として計算、その平均点を、参加児のきょうだい関係の状況で整理し、比較・検討してみた。(表 3)

表3. 子育てを大変と感じるか

() 内は 有効回答者数	参加児 (6)のみ	い上 有に きよ うだ (10)	い下 有に きよ うだ (3)	だ上 下有 にき よう (1)
感じる	2	1	2	0
やや感じる	4	1	1	0
どちらともいえない	0	3	0	0
あまり感じない	0	5	0	0
感じない	0	0	0	1
平均点*	4.3	2.8	4.6	1.0

*小数点第 2 位以下を四捨五入

表 3 から参加児が第 1 子めである場合の方が、より子育てを大変であると感じる割合が高いことがわかる。もっとも、参加児が下にきょうだいがいる第 1 子めである場合は、参加児自身もまだ乳児の年齢であることを考えると大変さが増すのは容易に想像がつく。

そこで、次に参加児以外の上のきょうだい 12 名の平均点をみたところ、3.8 点となり、第 2 子以降である参加児の平均点 2.8 点を上回った。

このことから、同じ年齢であっても、第 1 子めの方が、より大変さを感じる傾向があることがわかり、子育て経験を積むことにより、親の子育てへの負担感(大変さ)も軽減されるのではないかということが推察される。

次に、同じく 2008 年度・2009 年度の参加者に対して、子育てに対して大変さを感じた時の

サポートのひとつとして、「身近に世間話をしたり子どもの話をしたりする相手はいますか」という質問をおこなったところ、グループ参加当初の状況について回答者 20 名中 19 名が「いる」と答えた。

話し相手としては、母親仲間が 15 名ともっとも多く、次いで実家の両親(7 名)、近所の人〔自分より年長の母親仲間(3 名)〕、母親自身の姉妹、夫、友人、日ごろ利用している一時保育の保育士などが挙げられた。

子育て中の親子が孤立しがちといわれる現代社会において、話をすることのできる相手がいるということは心強いことである。これは、本グループ活動に参加している親子の多くが、知人や友人を介しての参加が多いことや、本学の周辺が、比較的、近所づきあいの残る地域性であることも影響していると推察される。

その中で「身近に話し相手がない」と回答した 1 名については、その後「グループに参加するようになって、親同士で情報交換ができてよかった。」との感想を寄せており、「ひろば」としてのグループ活動が、この母親にとって「安心できる場」とあり、「出会いの場」「交流の場」としての役割を果たしたといえよう。

ここまで、子育ての大変さに焦点を当ててきたが、大変さを感じる一方で親としての喜びや幸せを感じるのもまた子育てである。

そこで、アンケートで、2009 年度ひろば参加児の「いいところ・かわいいところ」について 1 つ～3 つ挙げてもらい、その内容について吟味してみたところ、大きく分けて、A:「ありのままのその子ども自身について」と B:「『～ができる』など、能力的な面やあいさつなど社会性に関するものとの 2 つに分類・整理することができた。(表 4)

なお、このアンケート内容はその後の活動において、参加者同士の交流や親へのサポートにも役立てている。

表4. ひろば参加児のいいところ・かわいいところ

A: 子ども自身について
・天真爛漫・体育会系なところ・ユニーク・笑うだけでもかわいい・しぐさの真似・寝顔・立ち直りが早い・首をかしげるしぐさ・偏食だがよく食べる・何かあると「ママ」と呼ぶ・楽しそうに遊んでいる姿・しゃべり方・笑顔・泣き顔・歌ったり踊ったりするしぐさ・「ママ好き」と言うところ・甘え方が上手・元氣よく動く・よく笑いよく話す
B: 能力・社会的なすばらしさ
・言葉がわかってきた・何でも挑戦するところ・絵本を真剣に見てくれる・好き嫌いが少ない・一人で工夫する・全てのことをきちんとする・兄と仲良し・ありがとう、ごめんねが言える・気配りができる

本アンケートは前期活動終了後に実施しているが、活動開始当初、我が子の「できない」部分ばかり目がいきがちであった親も含め、「子どものよいところ・かわいいところ」をどの親も3つ全部記入しており、余白に「他に……たくさんあります」と書いてくださった方もいた。

自分の子どもの良いと思えるところをたくさん見つけることができ、それを育てていくことは、子育ての原点であり、親自身の子育ての原動力となるものである。

また、子どもの良いところでは、例えば「ありがとう、ごめんなさいがきちんと言える」という社会性に関する内容もあるが、「笑うだけでもかわいい」と、「そこにいるだけで、子どもそのものがかわいい」と感じている親が多く、ありのままの我が子をかawaiiと思えるのは乳児期ならではのよさと考える。

その後の幼児期も含め、幼少期にありのままの自分を受け入れ認められるという体験は、人が生きていく上での基盤となる自己肯定感を育み、他者への信頼感を育み、自発的・意欲的に生きていく力の源となっていくということは、発達心理学的にも明らかなことである。

一方、自分（母親）自身についてはどうだろうか。同様に、「自分自身のいいところ・頑張っているところ」についても質問したところ、表5のような回答が得られた。

表5. 自分自身のいいところ・頑張っているところ

A: 親や妻としての役割
・子どもと一緒に遊ぶ・親と同居頑張っている・早起きして夫の弁当づくり・流れに任せて育児ができる・何でも子どもと一緒にやる・子どもに早寝早起き・子どもの話を聞く、認める・大声出さない・夫が帰宅したら起きる・家族のことは夫と話し合い、協力・子育ての経験を次の子に生かす・子どもの食生活を守る・家事を頑張っている・同じ年頃の子どものとの交流に気を配る・子どもを外に連れ出し見見を誘う
B: 自分自身のあり方
・楽観的・辛い事も眠ればすぐ忘れられる・嫌なことはすぐ忘れられる・几帳面・仕事・遊び好き・誰とでもコミュニケーションがとれる
その他……思いつかない

ここで見えてくるのは母親の懸命な姿である。親として、妻として、何が大切か考えながら努力している様子がうかがえる(例「子どもの食生活は守る!」)。自分自身のあり方についても、「楽観的」、「嫌なことはすぐ忘れる(2名)」など、力強い明るさへの意識も感じられる。

しかしながら、回答数に関しては、自分の子どものいいところについては、全員が3つ全部いいところを挙げているのに対して、自分のことになると3つ全部あげている人は12名中5名である。

中には「いいところは思いつかない」という母親もいた。サロンコーナーでの交流や活動などを通して、お互いを尊重し自分自身に向き合う体験を重ね、親自身もまた自己肯定感を育てていく必要があると考える。

3) 活動への満足度と今後への要望

2009年度活動に対する前期活動終了後および2009年度活動終了後に実施したアンケートから、子どもと親それぞれにとっての活動への満足度を「満足 ほぼ満足 どちらともいえない やや不満 不満」の5段階で評定してもらい、「満足」を5点、「不満」を1点として平均点を出したところ、表6のようなになった。

表6. 活動への満足度（2009 年度）＊5 点満点中

	前期の活動 (13 名中 11 名回答)	1 年間の活動 (13 名中 9 名回答)
子どもにとって	4. 8	4. 9
親にとって	4. 5	4. 7

今後に向けての要望については、子どもの活動に関しては「手遊びやリトミック的なものをもっと取り入れてほしい」といったものがあった。

手遊びや歌については、単に提供するというのではなく、日々の生活や親子のかかわりが楽しく豊かになるようなものであることが望ましい。また、乳児期は多くの自発的なかかわりや意欲が育ってくる時期である。大人からの働きかけが一方向的で課題的なものにならないよう、十分配慮しながら遊びや遊具なども取り入れていきたい。

また、親の活動に関する要望については、母親同士のサロンコーナー活動での「交流の時間がもっとほしかった」「もっとたくさん話したかった」という声が複数寄せられた。このことに対応するように、感想の自由記述欄に「他のお母さんやお子さんと交流できたのが楽しかった」との声が多く、参加理由の段階ではそれほど特に重視されていなかった「親同士の交流」への要望が強いということは、「ひろば」が単なる子どもたちを遊ばせる場所というだけでなく、親自身にとっても、リラックスした雰囲気の中で、「他の親子との交流を楽しむ場」でありたいとの思いが表れているのではないだろうか、と考えられる。そのように考えると、子どもたちの満足度に比べて、親の満足度がやや低い点数であることは、今後への強い期待の表れであると真摯に受けとめると共に、充実した活動をめざし、今後、より一層の努力をしなければならないと考えている。

4) サロンコーナー活動の実践

3)でも取り上げているが、親同士の交流の場として、サロンコーナーでの活動は乳児グループ活動において重要である。

2009 年度のサロンコーナーの主な活動内容は表 7 の通りである。

我々が実践している乳児グループ活動は参加登録制でメンバーが固定されている。一般的な「ひろば」では、登録も自由で、年間を通じてメンバーが流動的であるところも多い。こうした「ひろば」の良さは、気軽に行きたい時に訪れ、好きな時に帰ることができるという良さである。

これに対してメンバーが固定していることのメリットは、毎回のメンバーが固定していることで、親も子どもも安定した状態での活動の積み重ねが可能である点である。したがって表 7 にあるような、個と集団が互いにかかわりあいながら、相即的に発展していくことが可能となるのである。

一方で、乳児期のグループならではの課題もある。親同士の交流や話し合いをおこなう上で、乳児期の子どもたちであるため、親子の分離が難しいという課題である。発達的に、まだまだ 1 対 1 の身近な相手との愛着関係が大切な基盤となる時期であるため、同室での活動となる。そのため、別室ではなく「コーナー」という形で、親同士の活動をおこなっているのだが、特に子育ての深刻な話題などは、同じ空間に子どもたちがいる場合、なかなか深めにくい。

「親同士の時間をもっと持ちたい」「もっと話したい」という親の要望をどのような形で実現していくのか、今後の重要な課題である。

(2) 事例

ここでは、親支援・家族支援という視点から乳児グループ活動を捉えた時、本グループの特色が活動の成果としてよく表れていると思われる事例 2 つを取り上げ、活動を通して変化していった親子の様子について分析し考察する。

ただし、個人のプライバシーへの配慮と守秘義務の観点から、特定の事例としてではなく、事例を再構成した形で取り上げるものとする。

1) 育児不安が強かった A さんの事例

[参加当初の状況]

予定よりも早く a ちゃんを出産した A さんは a ちゃんが第 1 子である上、早産ということも重なり、育児全般への不安が強かった。a ちゃんは発育もゆっくりで、つい同月齢の子とも比較し、A さんは落ちこみがちであった。A さんの不安も感じるのか a ちゃんはよく泣く子で、それがまた A さんの不安をあおっていた。

[メンバーのかかわりと A さんの変化の様子]

A さんがもっとも気にしていた a ちゃんがすぐに泣いてしまうことについては、周囲が大きさに反応しないよう配慮し、a ちゃんの泣き声にこめられた思いを読み取り代弁するなどに努めた。

A さんへの対応については、発達等に関する不安については担当教員である本研究者がグループ内でも個別（相談）場面でも受けとめるよ

表7. ぽかぽかサロン活動内容

回	月	日	乳児グループ全体の活動内容	ぽかぽかサロン主な活動内容	活動の主なねらい・留意点	集団の発展段階	
①	5月	8日	出会いの日(オリエンテーションA)	担当教員によるインテーク (1人1人の話を丁寧に伺う)	2グループに分けることで、1人1人が少しでも多く時間をかけて丁寧に会おう	(集団における自己の安定)	
		15日	出会いの日(オリエンテーションB)				
②		22日		自己紹介・話題提供	リラックスし、全員で会おう。お互いの興味・関心を共有する。		
③	6月	5日		共通のテーマでの話し合い	個を集団全体で包み込むように受けとめる		
④		19日	おさんぽ	親子合同	他の親子とのかかわりを楽しむ		
⑤	7月	3日	七夕	七夕飾りの制作	もの(制作)を媒介に人とのかかわりを楽しむ		
⑥		17日	前期最後の活動	前期を振り返る	個を集団全体で、互いに尊重し受けとめる		(集団における自己の充実)
		夏休み	学生から暑中見舞いを送付				
⑦	10月	9日	後期第1回目の活動	近況報告・話題提供	個を集団全体で、互いに尊重し受けとめる		
⑧		24日(土)	乳児&幼児グループ合同家族参加デー(体をいっぱい動かして遊ぼう!)	合同家族参加デー	他集団(幼児グループ)と出会う・自集団への意識		
⑨	11月	6日		前回の合同行事の振り返り・学生から提案されたテーマでの話し合い	個の体験を集団で共有する		(集団における自己の拡大)
⑩		27日		学生から提案されたテーマでの話し合い	自分の体験を集団に伝える(自己表現)		
⑪	12月	11日	クリスマス会	クリスマス飾りの制作	核となる活動がありながら、個々の自発性が発揮される		
⑫		18日		1年間を振り返って	個の多様性・自由で活発な個の表明(自己表現)を集団で受けとめる		
		冬休み	年頭のあいさつと最終活動の案内はがきの送付				
⑬	1月	29日	また会う日まで		個の多様性・自由で活発な個の表明(自己表現)を集団で受けとめる		

う心がけた。また、サロンコーナーでの親グループでの交流や話し合いの場で、参加児の上にきょうだいがいる母親たちが先輩として、自身の経験を伝えたり、Aさんがaちゃんの成長を楽しみにできるような声かけをしてくれた。Aさんにはしだいによく笑うようになり、サロンコーナーでも活発に発言するようになった。Aさんが変化するにつれ、aちゃんも不安そうに泣くことがなくなっていった。

次年度に入ると、今度はAさん自身が、なかなか母親から離れられずに泣いている他児の母親に優しく声をかけサポートする姿がみられた。

2) 他のメンバーとの交流に距離を置きがちなBさんの事例

[参加当初の状況]

Bさんは、話しかければにこやかに応じるが自分から他のメンバーに積極的に話しかけることはあまりなかった。子どもであるbちゃんは第2子で、母親のBさんと同様、他児の遊ぶ様子を少し離れたところから見ていて、積極的に遊びに参加することはあまりない。たまに他児の遊具に興味を持って手を出すと、Bさんがやってきて我が子をたしなめて相手の子から引き離すというかわりが多かった。

[メンバーのかかわりとBさんの変化の様子]

Bさんの表情に特につらそうな表情があまり見受けられなかったので、Bさんのペースを尊重する形で、無理に集団の中心に誘うことはせず、その代わり必ず、リーダー（教員、学生）は毎回Bさんの傍らに行き、ことばを交わし、付近に他の親がいれば会話をつなぐように心がけた。

bちゃんについては、Bさん同様に必ずリーダーがつき、無理に誘うのではなく、他児との接点を増やすことを大事にした。

やがて、bちゃんが楽しそうにリーダーを介して他児とかかわる場面が増え、bちゃんと遊んでいる子どもの親とBさんが談笑しながらその様子を眺めるということが増えた。それにつれ、Bさんが自然とサロンコーナーで自分から

発言することも増えてきた。

ある時、Bさんが「自分は若い頃からあまり子どもが好きではなく、bは我が子だからもちろんかわいいと思うが、他の人にとっては面倒を見るのは大変だろうと思って、なるべく世話をかけないようにと遠慮してきた。ところが、学生さんたちは本当にうれしそうに楽しそうに遊んでくれて『そうか、遊んでもらっていいんだ。大変な時はもっと他の人に頼んでもいいんだ。自分1人で頑張らなくていいんだ。』と思えるようになった。」と語ってくれた。

V. 総合的考察

子育て中の親子にとって社会から孤立する不安は深刻である。とりわけ外出もままならない乳児期の子育てでは、幼児期と比較して集団と接する機会も少なく、ともすると密閉された空間で親子のみで過ごすこととなり、孤独感や育児に対する不安感、負担感をますます募らせ、精神的に追い詰められてしまう例も多い。

こうした状況に対応するため、近年、「子育てひろば」や「子育てサロン」と呼ばれる、子育て中の親子がつどう場が増えてきており、子育て中の家族を支える存在となっている。

しかし、その形態やスタッフのかかわり方は、それぞれに異なっている。

今回の研究では、この「ひろば」の持つ機能や特徴をどのように子育て支援グループ活動の特徴に統合し、親支援・家族支援に生かしていくのかという観点から探求を試みた。

最後に、今回の研究から得た気づきや、今後に向けての課題をまとめて終わりたい。

1. 固定したメンバーによる「ひろば」での「グループ活動」であるということ

現在、我々が実践している「乳児グループ・ほかほかひろば」の一番の特徴は、固定したメンバーによる「ひろば」での「グループ活動」であるという点にある。

一般に「子育てひろば」の多くが、利用者が自由に訪れて自由に過ごして帰っていく「場」であるのに対し、本学では固定したメンバーによるグ

ループ活動を実践している。メンバーが固定することにより、(4)でも述べたように、親も子も安定した状況のもとでの毎回の活動の積み重ねが可能となり、個と集団とのかかわりあいもまた、柔軟で発展的なものとなる。その結果「ひろば」という、一般に自由度の高い「場」においても集団の持つ力が十分発揮され、「個」と「集団」が共に育ちあえる「場」となることが可能となる。

また、0歳から3歳未満という、発達に大きな幅や個人差のある乳児期においては、グループ活動は、ともすると個々の構成メンバーの違いが大きすぎて集団としては活動しづらい面がある。その点、自由度の高い「ひろば」という形態は、それぞれの違いがありながらも、全体として同じ「場」に共にあることを自然に可能にしてくれる。乳児期の子育て支援活動に適した一形態といえよう。

2. 大学における「ひろば」での「グループ活動」であるということ

本乳児グループ活動のもうひとつの特徴が、多彩な参加者構成であるという点にある。

大学での活動ということで、学生が参加しているわけであるが、学生も他の参加者同様、固定したメンバーが授業という形で参加している。毎回の活動の準備に始まって、活動中は責任を持って役割を果たし、活動後には振り返りとまとめをおこなうことで、1回1回の活動が着実に次に生かされていく。

学生であるため、もちろん保育者としては未熟であるが、それにもかかわらず、参加親子へのアンケートでも学生の存在を高く評価する声は多い。先に挙げた事例(本文中、(2)Bさんの事例参照)からも、学生のかかわりや存在が親子に与える影響が大きいことがわかる。同様に、学生にとってもまた、長期間にわたり親子とかかわり、親の思いをききながら子どもの成長を共に見守るという経験はなかなか得がたいものである。

こうした、親と子・学生・教員とが共に活動を作り上げ、互いに育ちあうというグループ活動のあり方は、大学ならではの特色ある活動として非常に貴重な活動と考え、ぜひ今後も大事にしてい

きたいと考えている。

VI. 今後の課題

今後の課題としてまず挙げられるのが、でも取り上げた、親子の分離が難しい乳児期において、いかに親自身の活動を充実したものにしていこうかというものである。

親サロンコーナーの配置や子どもたちの活動との連携のあり方など、今後の活動に向けてしっかりと考えていかなければならない。

また、大学における子育て支援の特色である学生の存在であるが、活動に参加することによる学生自身の成長も実にめざましいものがあつた。今回の研究では、この部分に深く触れることができなかったが、今後、本グループ活動において学生が果たす役割や学生への教育効果とともに、次世代育成支援という視点からも研究を深めていきたいと考えている。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、多くの方々にご協力いただきました。はじめに、毎回の活動を楽しみに来て下さったお子さまたちとご家族のみなさまに心よりお礼申し上げます。補助員の和泉よしのさん、大学院生の小笠原範子さんには、学生の補佐役としても本グループ活動を支えていただきました。

最後に、この活動を共に作り上げてきた4年生のみなさん、この1年間のみなさんの成長ぶりには目を見張るものがありました。本活動での経験が、社会に旅立つみなさんの、少しでもお役に立つことができましたらこれ以上の幸いはありません。

全てのみなさまに、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 柳瀬洋美「こころを育む親支援 現代の子育て不安とこころの自立」『家庭教育研究所紀要』第25号(2003年), 13-23頁
- 2) 財団法人こども未来財団:i-子育てネット「つどいの広場」<http://www.i-kosodate.>

net/support/gthring/index.html 2007

- 3) 財団法人こども未来財団:i-子育てネット「地域子育て支援拠点事業」<http://www.i-kosodate.net/support/shienkyoten.html> 2007
- 4) 柳瀬洋美「大学における地域子育て支援活動を考える 乳児期・子育て支援活動の実践」『東京家政学院大学紀要』49(2009年), 67-73頁

参考文献

- 1) 垣内国光・櫻谷真理子 編著「子育て支援の現在 豊かな子育てコミュニティの形成をめざして」『MINERVA 福祉ライブラリー』54, (ミネルヴァ書房, 2002年)
- 2) 柏木恵子 著『子どもが育つ条件 家族心理学から考える』(岩波新書, 2008年)
- 3) 小伊藤亜希子・室崎生子 編『子どもが育つ生活空間をつくる』(かがわ出版, 2009年)
- 4) 厚生労働省『子ども・子育て応援プラン』(厚生労働省雇用均等・児童家庭局 総務課少子化対策企画室, 2005年)
- 5) 五味重春・田口恒夫・松村康平 監修, 幼児集団指導研究会 編『幼児の集団指導 - 新しい療育の実践 -』(社会福祉法人日本肢体不自由児協会, 1979年)
- 6) 汐見稔幸・佐藤浩樹・大日向雅美・小宮信夫・山縣文治監修, 大日向雅美 編集代表, 「地域の子育て環境作り」『子育て支援シリーズ』3, (ぎょうせい, 2008年)
- 7) 菅井正彦「子育て支援は母親支援」『子育てブックレットまいんど』 50/51 合併号(神奈川県児童医療福祉財団小児療育相談センター, 2001年)
- 8) 日本子どもを守る会編『子ども白書2009』(草土文化, 2009年)
- 9) 柳瀬洋美・中村洋子・鈴木百合子「大学における幼児グループ活動の展開 親グループ活動にみる個と集団の相即的發展」『東京家政学院大学紀要』48(2008年, 35-44頁)
- 10) 吉川晴美編『子育て発達支援 - 地域に開く大学として共に育つ保育活動から -』第 巻(東京家政学院大学児童学研究室・地域に開く子育て・発達支援研究会, 2001年)
- 11) 吉川晴美編『子育て発達支援 - 地域に開く大学として共に育つ保育活動から -』第 巻(東京家政学院大学児童学研究室・地域に開く子育て・発達支援研究会, 2002年)

(受付 2010.3.26 受理 2010.5.31)